〈解答〉

1　1　かくだい　2　ごういん　3　さず
　　4　営　5　旗手　6　挙

2　1　いわく
　　2　最初：楽しき　最後：るなり（完答）
　　3　汝　雖（モレ）　有（ルト）二　志　意一
　　4　エ
　　5　［例］かつて滞在した山の動物たちを見殺しにできないというオウムの健気さに感激した（37字）

配点　2　2～5は各2点、他は各1点　15点満点

〈解説〉

1

1　「拡大」は「形や規模を大きくすること」を意味する。「拡」の訓読みは「ひろ」で、「視野を拡げる」などの使い方がある。

2　「強引」とは「反対や困難を押し切って無理に物事を進めるようす」のこと。「強」には「おしつける」という意味もある。

3　「授ける」とは「目上の者が、目下の者に大事なものを与える」という意味で、「伝授」などの熟語がある。

4　「営む」は「計画を立てて仕事などをする」という意味の動詞。「営」の音読みは「エイ」で、「営業」「設営」などの熟語として用いられる。

5　「旗手」は「団体の行進などにおいて、その目印となる旗を持つ人」という本来の意味から転じて、「政治活動や芸術運動などで、その先頭に立って活躍する人」という意味でも用いられる。

6　「挙げる」は「対象を明確にするために具体的に数値などを示すこと」を意味する。「上げる」「挙げる」「揚げる」という同じ読みの言葉の使い分けに注意する。

2

「異苑」は、中国の六朝時代の宋（420～479）の時代に劉敬叔（りゅうけいしゅく）によって著された志怪小説集（奇談・怪談集）。当時の人物に関する怪奇話、民間に伝わる超自然的な説話から、仏教説話まで幅広く収められている。

1　文頭以外の「ハ行の音」は「ワ行の音」に変えて読むので、「いはく」の部分を「いわく」に改める。

2　2行目に『自ら念ふに』とあるので、直後の『楽しきといへども、久しくすべからざるなり』がオウムの思ったことである。また、3行目『ざるなりと。』の「と」は引用の格助詞「と」である。

3　「志意有る」と二文字以上はさんで返るので一二点を使う。「有ると雖も」はすぐ上の文字に返るのでレ点を付ける。

4　「何ぞ」には「どうして…か」という疑問の意と、「どうして…か、いや…ではない」という反語の意がある。この場合、5、6行目『汝志意有ると雖も（＝お前が助けたいという気持ちを持っていても）』という一文に続く言葉なので、「どうして足りようか、いや足らない（＝足りるはずがない）」と反語に訳す。

5　天神が言ったことに対し、オウムは7、8行目『嘗てこの山に僑居す。禽獣善を行ひ、皆兄弟たり。見るに忍びざるのみ（＝（わたしは）かつてこの山に滞在していました。動物たちの行いは正しく、みんな兄弟のようなものです。（黙って）見ていられません）』と答えている。羽の水をかけたところで山火事を消せるはずもなく、動物たちを救えないことは承知の上で、それでも何かせずにはいられないというオウムの健気な気持ちに打たれて、天神は火を消したのである。

〔大意〕

オウムが他の山に集まり留まっていることがあった。その山の動物たちは互いに尊重しあっていた。オウムも（その動物たちとのつきあいを）楽しく思ったが、あまり長居してはいけないと思い、去った。数ヶ月後、山で大火事があった。オウムは遠くから（火事を）見て、水に入って羽を濡らし、（山に）飛んでいって火に（水を）ふりかけた。（それを見た）天の神が言った。「お前が（助けたいという）気持ちを持っていても、（それだけの水で火事を消すのに）どうして足りようか（いや足らない）」。（オウムは）答えて言った。「（動物たちを）救うことができないのはわかっていますが、（わたしは）かつてこの山に滞在していました。動物たちの行いは正しく、みんな兄弟のようなものです。（黙って）見ていられません」。天の神は（オウムの気持ちに）感激して、火を消した。